

ふるさと安曇野 きのうきょうあした

No.25 2022.3.19

八面大王と田村麻呂

令和3年度 春季企画展 —その原点へ、魔道王登場— 令和4年3月19日～5月22日



八面大王に迫る

八面大王は、安曇野では知らない人がいない、ナンバーワンのスターである。

有明山の麓、魏石鬼の岩窟に、八面大王は多くの手下とともに住み着いていた。空を飛び、雲を起し、雨を降らす不思議な力を持ち、里に下りて乱暴をし人々を苦しめていた。朝廷は、坂上田村麻呂を派遣して八面大王を退治を命じた。八面大王は手強く、苦戦におちいる。その時、矢村の矢助が十三の節のある山鳥の尾羽の矢を献上した。田村麻呂がつがえて放つと、八面大王を討ち取ることができた。主人公は坂上田村麻呂であり、八面大王は脇役、人々を苦しめる悪役なのである。あくまで伝承であり、史実でない。八面大王は語られ書かれ、他の伝承も加わって、進化を続けている。東に勢力を伸ばす国家勢力、武将坂上田村麻呂と戦って敗れた地元の大將。伝説とは真逆の安曇野の英雄として語られる。博物館のエントランスでは、安曇野全域の航空写真とともに、想像して描かれた泉小太郎と八面大王が来館者を迎えている。

塔原村の八面大王

八面大王を発見

豊科郷土博物館の友の会郷土史部会は、平成30年度の活動で、文化財の現地見学を行った。ただ寺院などの文化財を見て歩くだけではつまらない。昔の絵地図を手にとって現在と比べて歩くのも面白いと考えた。最初は大足村（明科地区）。描かれた高札場の位置を確認、毘沙門堂の場所は動いていたが、大明神



第1図 塔原村絵図と八面大王の祠部分の拡大 (大庄屋関市文書 安曇野市文書館保管 上下逆)

(諏訪神社)や「しゃぐじ」は絵地図と同じ位置に。まさに「中世の村を歩く」の雰囲気であった。次回は塔原村。じっくり「塔原村絵図」を見ていると、犀川の河原に小さな祠「八面大王」を発見！

塔原村絵図

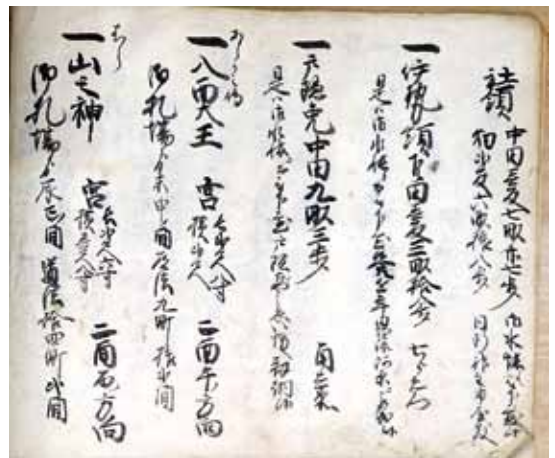
江戸幕府が命令した元禄国絵図の下図として「元禄十一年」1698年に制作した村絵図である。太い朱線は松本から犀川の東を生坂村などへ向かう川手道である。給然寺、山ノ神、三社大明神（現在の犀宮神社）、法音寺、雲竜寺などの社寺がメルクマールのように描かれており、現在と比較することが可能である。絵地図の西、「さい川」の川筋は緩やかに西に膨らんでいる。水田地帯の西にやや濃く茶色に塗られた河川敷に「あらかみ嶋」そして祠が描かれ「八面大王」と記される。対岸には、犀川に合流する高瀬川、穂高川、万水川が描かれ、その南に「穂高組狐島村」「保高組等々力村」とはいる。



第2図 麻績組光村塔原村明科村井堰絵図 部分
(大庄屋関市文書 安曇野市文書館保管)



第3図 堰絵図の八面大王社の祠部分の拡大



第4図 麻績組塔原村神社仏閣道法書上帳 部分
(大庄屋関市文書 安曇野市文書館保管)

麻績組光村塔原村明科村井堰絵図

1713年（正徳3）に描かれた、犀川東岸から取水し、光村から明科村に向かい最後は会田川へ落とす光堰の図面。犀川の東岸の塔原村、小字で下沖、河原と水田地帯の境に規模の小さな社叢の中に祠が描かれ「八面大王」と書かれている。

麻績組塔原村神社仏閣道法書上帳

国絵図作成のために、1698年（元禄11）に塔原村が絵地図とともに提出した資料である。

あらかミ嶋 八面大王 宮 長式尺八寸 横 式尺 午ノ方向
御札場より未申ノ間 道法 九町拾式間

宮の祠は幅が70cm、奥行き1mほどで、午、南向きである。人々が拝む際は、北を向くことになる。高札場から未申、南西の方向、距離は九町十二間、ほぼ1kmの距離である。これから位置を復元すると、第6図のように犀川の中に入ってしまう。

『信府統記 第十九 松本諸社記』

塔原村については次のように記されている。八面大王は祠のみで、縁起はわからない。

三社大明神

鳥居アリ縁起来由知レス

祠 六ヶ所 山神ニヶ所

八面大王 牛頭天王 浅間権現

縁起来由知レス

「明科町史」に登場する八面大王

1818年（文政元年）、塔原村の三社大明神（現犀宮社）の神主が、次のように訴え出た。文政4年に示談になるが、祭礼の方法や供物のほか、祭礼の日が定められた。そこに「御法田 八面大王 六月十六日」とある。祭礼は旧暦6月16日、グリゴリオ暦では7月後半。夏祭りである。

1849年（嘉永3）に犀川が満水し明科村、押野村に突き当たり、塩川原村の田畑を流出させた。その復旧にあたり西岸の押野村・塩川原村と東岸の明科村・潮村・潮沢村が争い、負傷者まで出た。当時、東岸が幕府領であったため、訴訟は江戸の評定所まで持ち込まれ、解決に6年を要した。1856年（安政3）に幕府役人が現地確認に訪れ、その際に「塔ノ原大王の森」にも立ち寄っている。

八面大王は塔原村の護り神

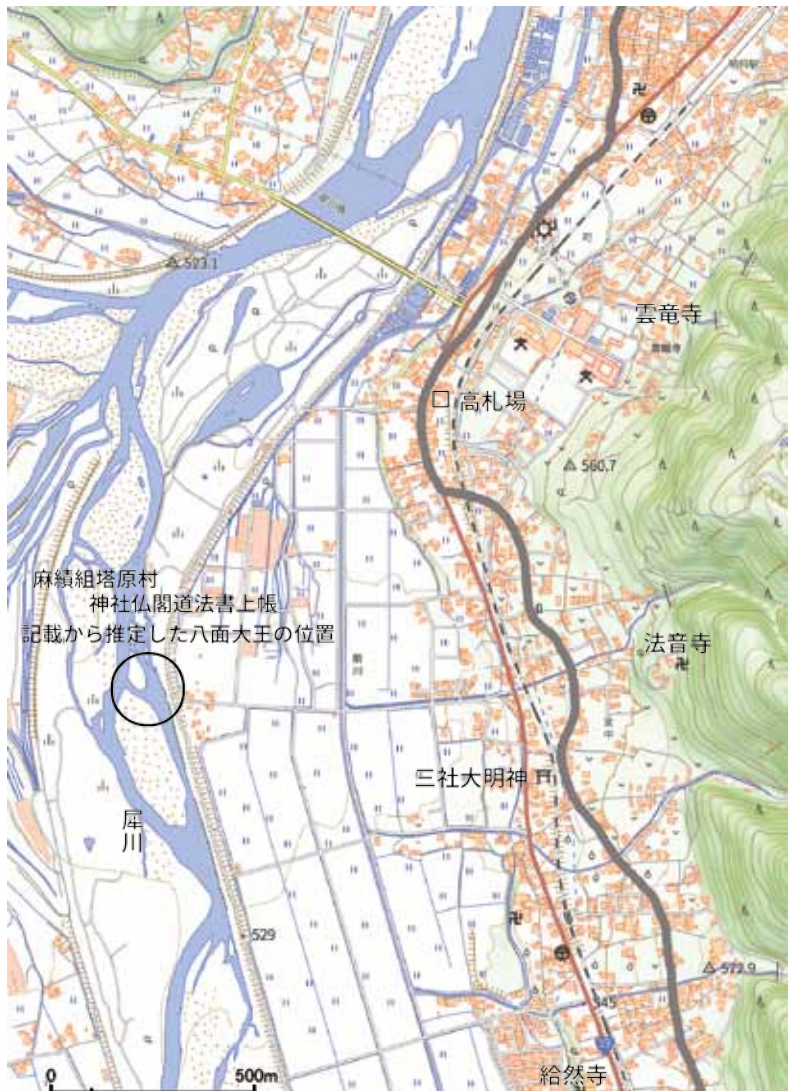
八面大王は、塔原村の犀川の河原、「あらかみ嶋」、「御法田」に祀られた神様であった。現在は、祠も社叢もない。近くにある犀宮社（三社大明神）の境内に合祀されている。

八面大王は、決して人々に乱暴を振るうものでもなく、人々が祈り敬うものであった。祠は南を向き人々は北を向いて拝んでいた。祭礼は現在の7月末、夏祭りである。台風や病虫害退散を祈願する祭りなのかもしれない。ただ、祠は河原である。犀川は幾度となく氾濫し、水筋も変え、田畑に大きな被害を与えている。

当時の塔原村と重柳・狐島村の境は現在より西であるが、時には大王の祠の東を流れていることもあった。水から人々の生活を護る神様であったのかもしれない。



第5図 犀宮神社 境内社の八面大王



第6図 絵図・道法書上帳から推定する八面大王の祠

魔道王、魏石鬼、八面大王、そして田村麻呂

『信府統記』の三つの鬼伝承

八面大王の伝承は、『信府統記』の「巻十七 旧俗伝」に登場する。事跡を見聞したことを「郡境諸城記」に収録したが、いわれがはっきりしない昔から伝わる風俗を「これらは古い時代を考えて、現在を知る一端なので捨てておけないので」と前置きして、収録している。鬼の伝承は二つ。一つは冒頭（以下、魔道王伝承）。もう一つは、五つの短い伝承を挟んで掲載される（以下、魏石鬼・八面大王伝承）。それに加え、神社縁起を収録した「第十九 松本諸社記」の「八幡宮 筑摩村」（以下、筑摩八幡宮縁起）に鬼伝承がある。【『信府統記』の関係する部分の読み下しは、別紙に掲載】

●**魔道王伝承**：松本平創世の泉小次郎伝説に多くを割き、「然る所に」に続けて、中房山をすみかとする鬼神、「鬼賊の巨魁」魔道王が登場する。里に出て人々を悩ます魔道王を、諸々の神が討ち果たす話である。最後は、筑摩八幡宮の話につながっていく。

●**魏石鬼・八面大王伝承**：「往昔中房山・・・」と入り、坂上田村麻呂が鬼賊退治をする話である。中房山にいる鬼の名は、魏石鬼、あるいは義死鬼、「又」を付け八面大王と記している。なお、もう一ヶ所、八面大王の祠という言い伝えがあるらしいと記している。「一説では」と断って筑摩八幡宮の話に続ける。

●**筑摩八幡宮縁起**：魔道王伝承と同じように泉小太郎、小次郎伝説の松本平創世の物語に多くを割き、「然る所」に続けて、中房山に住む人々を苦しめる鬼賊たちを、宣旨を受けた雨宮殿・吉田殿が八幡大神の加護によって退治する話である。筑摩八幡宮の成立につながっていく。

信府統記

松本藩五代藩主水野忠幹の命令によって、家臣の鈴木重武・三井弘篤が編纂した地誌である。全三二巻で1724年（享保九）に完成した。領内の地誌、社寺沿革、名所記をはじめ、信濃国の諸城・郡境の沿革、歴史が略述されている。収録した史料は質が高く、当時の安曇・筑摩郡ばかりではなく信濃国を知る基本的文献史料として重要である。

最初の印刷・出版は、長野県東筑摩郡北深志町吟天社（社主高美甚左衛門、大岩昌臧）、発売が高美甚左衛門である。1884年（明治一七）に、最初は五冊本で、続いて一〇冊分本で再版された。底本は水野家改易後の松本藩主戸田家が水野家分家所蔵の原本を借用し書き写した戸田本を使用しているようである。現在、図書館等で手に取ることができるのは次の二冊である。信濃史料刊行会が1973年（昭和四八）に『信府統記』を翻刻・発行した『新編信濃史料叢書』第五・六巻と、国書刊行会が1996年（平成八）吟天社刊行本（明治一七）を復刻刊行した『信府統記』である。



第7図 信府統記 吟天社刊行本

変化した鬼伝承

筑摩八幡宮縁起と魔道王縁起の鬼伝承は、筑摩・安曇郡の創世伝承のあくまで一部である。魏石鬼・八面大王伝承には創世伝承はなく、鬼伝承のみである。

鬼の伝承部分の基本的ストーリーは、人々を苦しめる中房山の鬼が、討ち果たされ、最後は筑摩八幡宮につながり、共通する。ところが、鬼の名称が鬼賊、魔道王、さらに魏石鬼、八面大王、さらに征伐者も

	筑摩八幡宮縁起	魔道王伝承	魏石鬼・八面大王伝承
安曇・筑摩郡 創世神話	泉小次郎伝説	泉小太郎伝説 泉小次郎伝説	
鬼の呼称	鬼賊	鬼神 魔道王	鬼賊 魏石鬼 (義死鬼) 又は八面大王
鬼の本拠地		島立郷の鬼場	魏石鬼窟
戦場			矢沢
討伐者	雨宮殿 吉田殿	諸々の神	坂上田村麻呂
加護する神	八幡大神		鹿島大明神
陣		征矢野野々宮	矢原庄 中界 川合
年代			延暦24年
首実検		古厩原	
耳塚		邪族の首	賊の耳
筑摩八幡宮	旗をご神体	旗をご神体	鬼王の首を埋め
136の鬼の首	飯塚	飯塚	
旗竿	竹林に	竹林に	
鬼賊剣と寺院等			戸放権現 五龍山の滝壺 若澤寺 満願寺 放光寺
地名由来等			耳塚 仁科 狐島 借馬 駒沢 鹿島村

第8図 鬼伝承の比較

雨宮殿・吉田殿、諸々の神、田村麻呂など、違いも見られる。筑摩八幡宮縁起には地名がほとんどでない。「魔道王伝承」は、筑摩郡や安曇郡の地名がわずかに入る。魏石鬼・八面大王伝説は、安曇郡内を中心に多くの地名が入れられ、鬼に化けた野狐が討ち取られた狐島など、地名由来の説明がみられる。面白いのは、魔道王伝承で邪賊の首を埋めた耳塚、魏石鬼・八面大王伝承では鬼賊の耳を埋めた耳塚に変わる。三つの鬼伝承部分を比較すると、第8図のようになる。身近な地名を入れ地域に溶け込み、地域との密着度を高めている。本来は、松本平の創世伝承の一部であった鬼伝承は、筑摩八幡宮縁起 → 魔道王伝承 → 魏石鬼・八面大王伝承と変化する中で、最後には安曇野の鬼伝承だけになったのであろう。

登場する鬼は、魏石鬼

『信府統記』には三伝承のほかに、寺社縁起、地理に鬼神や鬼賊が登場する。

●**穂高大明神**：穂高神社である。縁起には、光仁皇王の時代（在位770—781）に、義死鬼が暴れ回り社殿を焼き払ってしまった。桓武天皇の時代、延暦年間、田村利仁が命令を受けて退治したと記される。

●**幕岩権現（松川村鼠穴）**：田村将軍が、征伐の際に岩穴に籠った魏石鬼を、山に幕を張って管弦を催し誘い出した。そこを、利仁が討ち取った。幕を張った形の岩に、権現の社を建て幕岩権現と呼んだとある。魏石鬼岩窟の東へ1kmほど離れた、安曇野市と松川村の境の尾根上に、現在も幕岩と呼ばれる岩がある。

●**五龍山明王院（安曇野市穂高）**：正福寺である。大同元年に田村将軍は、魏石鬼を退治の後、さらに鬼の妨げを制止するため不動明王を安置した。また、魏石鬼がこもった岩の上に准胝観音を安置し観音堂を建立したという言い伝えがある。

筑摩八幡宮縁起では鬼賊の固有名詞はなく、魔道王伝承で鬼神の酋長を魔道王、魏石鬼・八面大王伝承では鬼賊の名を魏石鬼、義死鬼、八面大王と呼んでいる。ところが縁起等は、魏石鬼（義死鬼）で、魔道王、八面大王はない。さらに魏石鬼が登場する縁起を持つ社寺は、中房川流域である。



第9図 幕岩（松川村）

鬼賊のすむ中房山、そしてすみか魏石鬼の岩窟は

●**鬼のすみか中房山**：中房川はあるが、現在のどの地図を見ても中房山はない。『信府統記』「松川組山川地理ノ事」に、有明山は中房山の北方、中房山麓の宮城に明王院、さらに、中房山の奥に弾正地獄ノ湯、室ノ湯、知死期の湯があるとす。鬼の根拠地である中房山は、中房川沿いにあったことになる。

●**魏石鬼の岩窟（安曇野市穂高）**：『信府統記』には、窟内の広さは「四間四方」、7mのほぼ正方形で、窟内の高さは「七尺五六寸」、2.5mの巖窟であると。天井をはじめ大きな岩で築かれ、外面は松や楓などが茂って覆われている。北を向いて「一間余り」、2mほどの出入り口がある。窟内は暗黒である。

1921年（大正10）に考古学者鳥居龍蔵がドルメン式という巨石を用いた特殊な構造の古墳として発表し注目されることとなった。穂高古墳群D1号墳として台帳に登録されている。

1986年（昭和61）に穂高町誌の編纂に伴って調査が行われる。観音堂が建ち磨崖仏が彫られた厚さ3.6m、巾7.9mの巨大な岩の下に洞窟状の穴である。この穴が自然か、人工的に掘り抜いたのか、わからない。構造は横穴墓に近い。ただ内部は、横穴式石室のように石を積み、大きな自然石を天井石に見立てている。内部は、奥行き4.3m、最大幅2.7m、高さ2.5mを測る。7世紀中頃以降に造られた不思議な古墳

である。出土遺物には金銅張りの馬具や耳飾りなどがある。古墳内から、永楽通宝や中・近世陶器の出土から、中世から最近までが人々が何らかの活動をしていたことがわかる。

鬼の墓

●筑摩八幡宮（松本市筑摩）：薄川南に筑摩神社がある。室町時代以降、小笠原氏が筑摩郡に入ると軍神として厚い保護を受ける。江戸時代を通して藩主からの崇敬も厚い。本殿は1436年（永享8）に、信濃国守護小笠原政康により再建され、重要文化財に指定されている。鬼賊たちの首を埋めたとされる土饅頭の「飯塚」は、玉垣に囲まれた本殿の道を挟んで南西に祠とともにある。ただ魏石鬼・八面大王伝承では、「一説では」と断って、首を庄内の地に埋めて、その塚の権現を移したのが筑摩八幡宮だとする。

●耳塚（安曇野市穂高）：鬼賊の首あるいは耳を埋めたとされる。穂高川の西側、最低位段丘の先端の水田地帯の中にある、穂高古墳群H1号墳をいう。直径15mの円墳、墳丘の高さは2mを測る。古墳でない可能性も指摘される。塚の上には大塚様の祠を置かれ、耳の神様として知られている。

鬼を倒した田村將軍、田村麻呂 そして利仁

征夷大將軍坂上田村麻呂は、蝦夷との801年（延暦20）の戦いで勝利した英雄であった。810年（大同4）の菓子の乱でも活躍する。死後も、国家非常時に田村麻呂の塚墓は鼓を打ち雷電が鳴るといわれ、武士や民衆を問わず武神や軍神として崇敬された。また、清水寺を建立した事でも有名である。田村麻呂が、加護に感謝して建立したという縁起を持つ寺社は、東日本を中心に数多くある。

室町時代初期に、征夷大將軍坂上田村麻呂による鈴鹿山の鬼神退治を描いた、能『田村』が成立した。田村麻呂よりも彼が信仰する千手観音が活躍する。室町時代の物語『田村の草子』などでは、田村麻呂と鎮守府將軍藤原利仁と融合し、「田村利仁」と呼ばれる。藤原利仁は『今昔物語』の芋粥説話のもう一人の主人公として有名である。ま



第10図 魏石鬼の岩窟



第11-1図 筑摩八幡宮拜殿（松本市筑摩）



第11-2図 筑摩八幡宮 飯塚

た、利仁には新羅征伐の命を受け、山城国を出発したところそれを察知した新羅の調伏のために命を落とすという説話にも登場する。『信府統記』の社寺縁起にも「田村利仁」が登場する。謡曲や説話が地方へ広がる中で、伝承や縁起に影響を与えたのであろう。

田村麻呂伝承を持つ寺社

慈眼山若澤寺（松本市波田） 江戸時代に伽藍整備が進み、「信濃日光」とまで呼ばれた。しかし、明治初年の松本藩の廃仏毀釈によって廃寺となる。田村堂は、室町時代後期に厨子として製作されたが、田村將軍をまつる建物として、境内の最上段に置かれた。廃寺後は堂は現在地に移され、1953年に重要文化財に指定された。なお、堂内の田村像は1708年（宝永5）に、水野出羽守の家臣で、田村麻呂の末葉という小嶋九郎左衛門が寄進したものである。京都市の清水寺も、本堂近くに「開山堂」「別名 田村堂」があり、清水寺創建者の坂上田村麻呂公夫妻の像が祀られている。什物に三つに折れた石剣があり、廃寺後、盛泉寺の所蔵となっている。形態から縄文時代の石剣である。絹の袋に入り、箱に納められている。若澤



第12図 田村堂・田村人形（松本市波田 重要文化財）

寺の什物帳に、1728年（元文3）は「一、劔 箱入り」、1778年（安永7）は「鬼神飛行劔 箱入」、1868年（慶応4年）は「鬼神飛行劔 壺本」とある。魏石鬼・八面大王伝承に、魏石鬼の石劔の鋒が若澤寺に納められたが、燃えてしまったとある。若澤寺の縁起に魏石鬼は登場しない。



第14図 伝 鬼神飛行劔（松本市 盛泉寺蔵）

●慈眼山清水寺（山形村）：標高1200mを越える、鉢盛山の中腹にある。奈良時代、行基が自ら彫った千手観音像を安置したのが創建と言われる。延暦年間、田村麻呂が祈願し東北遠征に向かった。勝利して帰還する際にこの千手観音を京都の清水寺に移したという言い伝えがある。『信濃国筑摩郡西山清水寺図』には、「田村墓」、「田村堂」などの施設のほか、「田村桜」が描かれている。版木は清水寺に伝わっている。



第15図 田村様の腰掛け石と田村宮（山形村 清水寺）

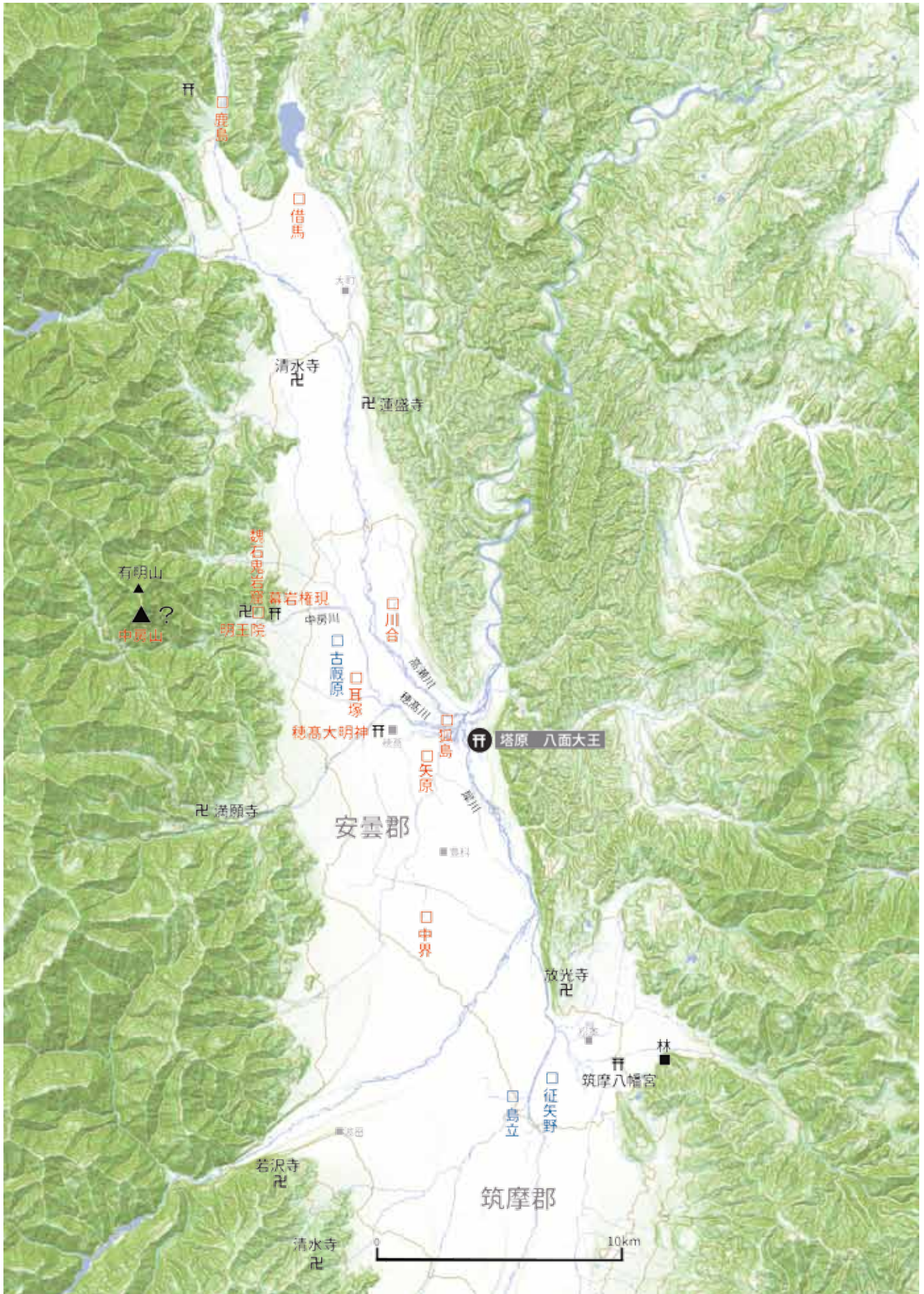
坂上田村麻呂創建伝承を持つ寺社は、これ以外に、鬼伝承と結びついた穂高神社、筑摩八幡宮、幕岩権現、五龍山明王院などに加え、栗尾山満願寺（穂高）、源花山盛蓮寺（大町市）、慈眼山清水寺（大町市）、日光山放光寺（松本市）など、松本平の広域に分布する。

八面大王とは誰だ

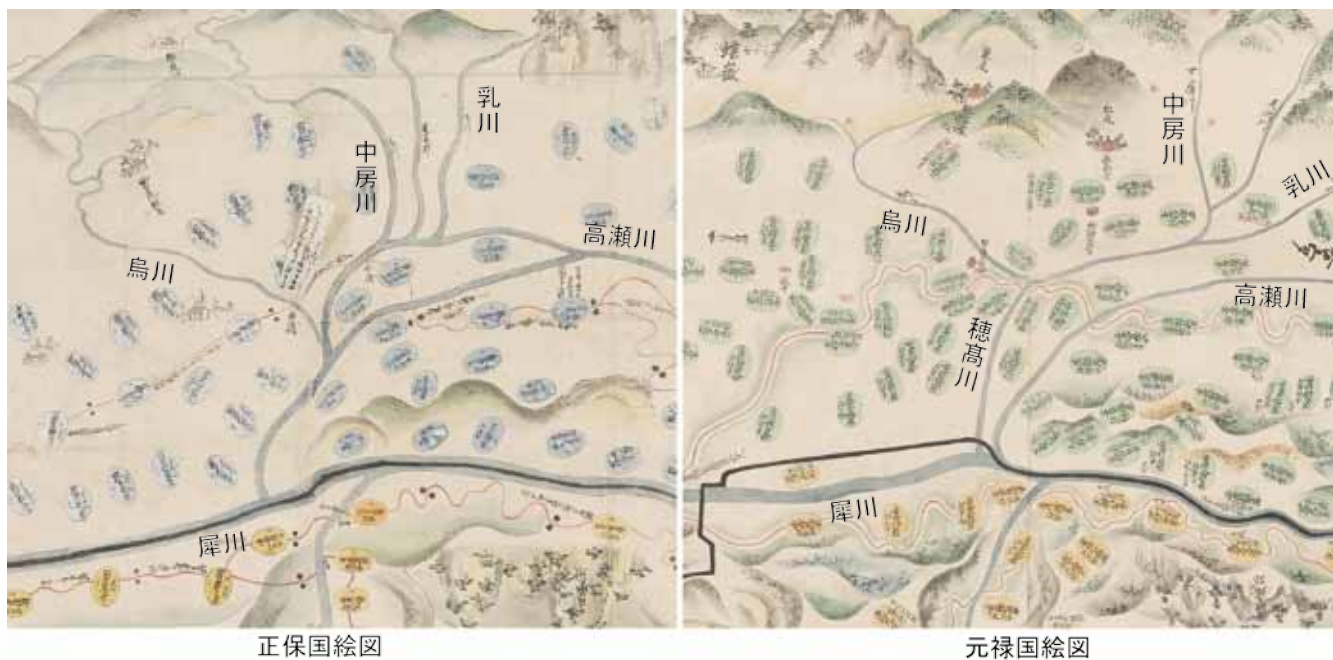
『信府統記』に八面大王が登場する。鬼賊「魏石鬼」の「又」の名として。ところが、塔原村の犀川河原、あらかみ嶋に神、八面大王として、すでに祀られていた。

魔道王伝承と筑摩八幡宮縁起は、長い松本平創世神話に続いて、「然る所」、「そうではあるが」を入れ、水が流れて安全な土地になったが、中房山の鬼が里に出てきて人々を悩ますとなる。つなぎから考えると水の問題が発生したことになる。安全な土地になったが、中房山から水が流れだし、人々を苦しめたと読みかえることもできる。魏石鬼の伝承は、江戸時代の穂高・松川組、中房川（穂高川）流域の村々が登場する。江戸時代、高瀬川とともに中房川の下流、穂高川があふれ、川筋が大きく変わり、大きな被害を出す。中房川の洪水は中房谷の奥から多量の流木を押し出した。里の人々は、奥の深い中房溪谷のうっそうとした森の中に鬼がいたと想像したのであろうか。

犀川に面した狐島村、等々力村、重柳村、踏入村など穂高組の諸村は、もう一つやっかいなことがあった。それは犀川の水害であった。江戸時代の初め、現在より西側を流れていた犀川は、大雨などで水かさが増すと田畑が水をかぶり、村境もわからなくなった。勝手に堤防を築くと、大雨の際に流路が変わり反対側の村々に被害を及ぼした。対岸の麻績組塔原村・光村・田沢村との川除普請、堤防工事の争いは200年間で20回もあり、時には相手の村に殴り込みをかけ、負傷者もでた。



第16図 鬼伝承の地名の分布
 (赤字 魏石鬼・八面大王伝承 青字 魔道王伝承 黒字 田村麻呂伝承地)



第17図 国絵図にみられる川筋の変化

正保国絵図（1648年頃に作成）では、高瀬川は二股に分かれ中州に、狐島村、青木花見村、細野村があり、その西側の川筋に乳川、芦間川、中房川、さらに高瀬川と烏川合流し一筋になって犀川と合流する。穂高組と麻績組の境は犀川である。ところが元禄国絵図（1701年頃に作成）では、現在に近い川の合流となり、穂高組と塔原村を含む麻績組の境は犀川の西になっている。この川筋の変更は人々の努力もあるが犀川の洪水の影響が大きい。この景観の変化は、『信府統記』編集の時期である。

手のつけられない中房川の土石流の恐ろしさを鬼にたとえ、魏石鬼と呼んだのではないか。なぜ魏石鬼の又の名を、八面大王とも呼んだのであろう。

八面大王は、塔原村の人々を川から護る神様であった。穂高組の人々は、暴れる犀川を挟んで青々と茂る社叢の八面大王を、鬼と表現したかったかもしれない。そこに、当時流布してきた説話等の英雄、田村麻呂や利仁に、「退治」を願って伝承として成立したのではないか。

「魏石鬼或ハ義死鬼トモ云ヒ又八面大王ト稱ウ」と、魏石鬼は「云フ」なのに対し八面大王は「稱フ」とあり、たたえる表現をしている。「八面大王ノ社トテ祠モアリシト云フ」と、編者たちも神様であることは理解していたのではないか。それも塔原村の。

今回は、元禄国絵図作成のための調査資料と、『信府統記』に基づいて、八面大王の伝承を考えてみた。現在、八面大王は数多く語られている。時には、このように原点に戻って考えてみてはどうだろうか。

（原 明芳）



博物館のエントランス

「ふるさと安曇野 きのう きょう あした No.25」

編集 安曇野市豊科郷土博物館

発行日 令和4年3月19日

安曇野市豊科郷土博物館

〒399-8205 長野県安曇野市豊科4289-8

TEL：0263-72-5672 / FAX：0263-72-7772

URL：https://www.city.azumino.nagano.jp/site/museum/